短 報

子宮頸部 HPV 感染症における細胞診 follow up 成績

順天堂大学浦安病院検査科¹⁾, 同 婦人科²⁾喜納 勝成¹⁾ 古谷津純一¹⁾ 川島 徹¹⁾ 宇津野 博²⁾
石 和久¹⁾

I. はじめに

現在, 子宮頸部病変, 特に子宮頸癌と Human papillomavirus (HPV) との関連についての検索法は DNA 診断法が最も信頼性が高いとされている。しかし, 通常病院検査室においては細胞診, 組織診により間接的に HPV スクリーニングをして子宮頸部病変との関連をみているのが現状である。

今回われわれは子宮頸部 HPV-DNA 陽性例 (type 6/11, 16/18, 31/33/35) を最長 4 年半 follow up し, 出現細胞の経時的変化をみ, DNA 診断法との関連性を検討したので報告する。

II. 材料と方法

当院婦人科を受診し, 子宮頸部に病変を認めた 120 人の患者を対象に southern blot 法および dot blot (Vira type 東レ) 法を行い HPV DNA が陽性となった 25 例を最短 1 年, 最長 4 年半 follow up し, HPV 感染症に特徴的所見とされている koilocytes を中心に dyskeratocytes, binucleated cells, metaplastic cells

(Meisels が提唱している化生性傍基底細胞³⁾を含むいわゆる化生細胞) などの細胞所見の経時的変化を HPV type 別に検討した。なお, follow up 中に細胞学的または, 組織学的変化 (軽快または増悪 (組織学的異型度を増したもの)) のみられた場合に dot blot 法または, 組織材料による *in situ* hybridization 法にて HPV-DNA の有無を確認した。

III. 結 果

HPV type 別経時的細胞所見を表に示す。

1) HPV type 6/11 では 9 症例中, 初診時に koilocytes を認めたのは 3 症例 (33.3%) でありこのうちの 1 例は 1 年間継続的な出現を認め他の 2 例は 6 ヶ月以内に消失した。dyskeratocytes および binucleated cells の出現率は初診時に比し 2 年後では低下あるいは出現を認めなかった。組織学的には HPV type 6/11 (9 例) では増悪例はなく軽快例 4 例 (44.4%), 不変例 5 例 (55.5%) であった。

2) HPV type 16/18 では 9 症例中, 初診時に koilocytes を認めたのは 3 症例 (33.3%) でありこのうちの 1 例は継続的な出現を認め, 他の 2 例は 1 年以内に消失した。dyskeratocytes, binucleated cells は follow up 期間中はほぼ継続して出現した。組織学的には HPV type 16/18 (9 例) では軽快例はなく不変例 6 例 (66.7%), 増悪例 3 例 (33.3%) であった。

3) HPV type 31/33/35 では 7 症例中, 初診時に koilocytes を認めたのは 2 症例 (28.6%) でありいずれも 1 年以内に消失した。dyskeratocytes, binucleated cells は follow up 期間中はほぼ継続して出現した。組織学的には, HPV type 31/33/35 (7 例) では軽快例 1 例 (14.3%), 不変例 4 例 (57.1%), 増悪例 2 例

Follow up study of cervical human papillomavirus infection

Katsunari KINA¹⁾, C.T., I.A.C., Junichi KOYATSU¹⁾, C.T., I.A.C., Tooru KAWASHIMA¹⁾, M.T., Hiroshi UTSUNO²⁾, M.D., Kazuhisa ISHI¹⁾, M.D., M.I.A.C.

¹⁾Department of Clinical Laboratory, Juntendo Urayasu Hospital, Juntendo University, School of Medicine

²⁾Department of Obstetrics and Gynecology, Juntendo University, School of Medicine

論文別刷請求先 ☎ 279 千葉県浦安市富岡 2 の 1 の 1 順天堂浦安病院検査科 喜納勝成

平成 2 年 8 月 29 日受付

平成 3 年 2 月 22 日受理

表 HPV type 別経時的細胞所見

HPV type	年齢	初診	3ヵ月	6ヵ月	9ヵ月	1年	2年	3年	4年
6/11	15	DBM	DBM			D M			
	30	K BM	K DBM	K DBM	M	(-)	M		
	31	M	M			(-)			
	25	K DBM				K DBM			
	30	DBM	DB	BM	(-)	B	(-)	(-)	
	31	M		DBM	DBM	M	BM	M	
	27	D				M	DBM	M	D M
	20	D	疑KD M	D M		D M			
	40	K DBM	K BM	D M		D M	M		
	16/18	50	DB	DBM	DBM	疑K DBM	D M		
	40	DB	DBM	M		M	(-)		
	39	BM	疑K DBM	DBM		D			
	57	D M	D	DBM		DBM			
	34	M	(-)	DBM		D M	M		
	33	D M	D	DBM		D M	D M		
	27	K DBM	M	M	BM	K DBM	K DBM	BM	
	16	K DBM	K DBM	K DBM	K DBM	DBM	BM		
	40	K DBM	K BM	D M		D M	M		
	31/33/35	41	M	B	DBM	DBM			
	51	M	D M	DBM		BM			
	42	K DBM	K DBM	M	D M	BM	D		
	32	D M	D M			(-)			
	39	疑KD M	D	B	B	D M			
	40	K DBM	K BM	KD M		D M			
	65	DBM	BM	D M		M			

* K : koilocytotic atypia D : dyskeratocytes B : binucleated cells M : metaplastic cells

(28.6%) であった。

IV. 考 察

細胞学的に HPV 感染症の特徴的所見として koilocytes, dyskeratocytes, binucleated cell などがあげられ、その出現頻度や検出上の意義については、報告者によりさまざまであるが HPV-DNA 検出例においてこれら細胞、特に koilocytes は出現率は少ない。

出現細胞の経時的変化では全体的に koilocytes の出現頻度は低いが、dyskeratocytes, binucleated cell, metaplastic cells は、follow up 期間中、高頻度に継続して認めた。しかし DNA タイプ別による出現細胞の差は認められなかった。また HPV type 6/11 における組織学的変化は増悪したものではなく、不変ないしは軽快を認めたが HPV type 16/18 では 9 例中 3 例 (33.3%) 増悪し、また、HPV type 31/33/35 においても 7 例中 2 例 (28.6%) に増悪を認めた。すなわち、

細胞診単独での HPV 感染症の診断は困難であり、したがって経過中 1 回は、DNA 診断法を併用すべきである。また、HPV 感染を疑う場合、標本中に koilocytes を認めない場合も dyskeratocytes, binucleated cells などの所見を認める場合は HPV の存在を考え十分注意し、積極的に follow up する必要があると思われる。

文 献

- 1) 石 和久 : Dot blot (Vira pap) 法による人子宫颈部パピローマウイルス感染の検出について、一細胞診との比較一、臨床病理, 36 : 1074~1078, 1988.
- 2) Meisel, A., et al : Condylomatous lesion of the cervix, colposcopic and histopathologic study, Acta Cytol, 21 : 379~390, 1977.
- 3) 古田 則行・他 : ヒトパピローマウイルス (HPV) 感染細胞所見の検討—細胞診による HPV 感染推定のために—, 日臨細胞誌, 29(4) : 493~497, 1990.